

せ る 辺 境 の オ オ カ ミ は カ ン ト ボ ー イ を 孕 ま

2026
年
8
月
16
日

目次

第1話 匂い漏れと最初の交尾

第2話 白滝の沢と再交尾

第1話 匂い漏れと最初の交尾

晩秋の冷え込む山風が、深い谷を抜けて急な尾根道を容赦なく吹き抜けていた。

官給の厚手の作業着に身を包んだ測量技官の湊（みなと）は、赤茶けた岩場に据え付けた真鍮製の平板測量儀の前にしゃがみ込み、視準器を覗き込みながら野帳に鉛筆を走らせていた。

手袋を外した指先が、凍てつくような山の冷気で赤くかじかんでいる。指先を口元に寄せて温かな息を吹きかけ、かじかむ関節を解

しながら、湊は岩肌に打ち込まれた境界杭を鋭い目で見据えた。

「……境界標の木杭、三十四番。標高千二百五十、傾斜角二十二度。よし、稜線の図面との誤差は許容範囲内だ。この岩尾根を越えれば、北側の境界線はおおむね確定する」

小さく息を吐き出すと、白い湯気が冷えた夕暮れの空気の中にはどけて消えた。

湊がこの山深い獣人の集落「水木里（みずきのさと）」へ官給の測量技官として派遣されて、今日でおよそ三週間になる。人間の国と獣人の自治領との境界稜線に正確な地図を引き、古びて朽ちかけた国境の木杭を打ち直すのが湊に課せられた職務だった。

だが、閉鎖的で縄張り意識の強い山の獣人たちは、人間の役人である湊を最初から快く思っていなかった。彼らにとって山は生きるための領土そのものであり、人間が定規と分度器を持ち込んで境界線を引く行為そのものが、傲慢な侵略の前触れのように映るのだ。

里の広場や番屋の前を通りかかるたび、獣人たちから投げかけられる冷徹で排他的な視線。獣特有の低く唸るような警戒の気配。その刺すような空気の中で、湊はただ黙々と測量盤と木杭を担ぎ、険しい岩肌を登り続けてきた。

そんな排他的な里において、湊の道案内兼「監視役」として常に張り付いている男がいた。

水木里の警邏頭（けいらがしら）を務めるオオカミ獣人——嶺（れい）である。

湊が測量用の重い鉄製巻尺を巻き取っていると、背後の枯れ木の木立から、静かな足音が近づいてきた。乾いた落ち葉を踏みしめる音すらほとんど立てない、獣人特有の極めて洗練された無音の歩行だ。

「おい、測量員。今日の作業はここまでだ。日が落ちれば、この尾根道は一気に氷点下まで冷え込むぞ」

低く地鳴りのように響く男の声が、静まり返った尾根に響き渡る。

湊が振り返ると、そこには灰褐色の豊かな狼耳をピンと立てた嶺が立っていた。

嶺は湊の頭一つ分以上も高く、肩幅は倍近くある。腰に差した使い込まれた山刀と、夕暮れに鈍く光る金色の両目だけで、十分な威圧だった。

（……相変わらず、隙のない体つきだな。こんな化け物じみたオカミ獣人に背後から睨まれながら山を歩くのは、毎日本当に神経がすり減る……）

湊は心の中で小さく悪態をつきながら、背負い籠に平板と真鍮の測量羅針盤を慎重に収めた。

「まだ日没まで半刻はある。あと一本、あそこの突き出た岩鼻に木杭を打ち込んでおきたいんだが」

「ならんと言っている。山の風が変わった。この谷は一度霧が巻けば、足元の一寸先も見えなくなる。日没後に滑落して死なれては、里の監視不行き届きとして中央から厄介な査察を送り込まれる。迷惑するのは俺たちだ」

嶺は有無を言わせぬ冷徹な口調で短く断じた。群れを率いるオオカミ獣人の戦士は、他者に命令を下し、従わせることに慣れきっている。

「……頑固だな、警邏頭さんは。分かったよ、あんたの言いつけ通りにするさ」

湊は皮肉混じりに応じ、重い背負い籠の革紐を両肩に掛け直した。

湊には、何があっても他人に知られてはならない、命に関わる秘密がある。

男として育てられ、男の服を着て公職に就いているが、湊の身体は普通の男とは根本的に異なっていた。

骨格や引き締まった筋肉、平らな胸板など上半身の体つきは成人男性そのものだが、股間には男の象徴である陰茎も睪丸も一切存在

しない。その代わり、生まれつき人知れず子宮と女性器を備えて生まれた「カントボーイ（胎持ち）」なのである。

思春期を迎えて身体の異変に気づいて以来、湊は毎朝、幾重にも巻いた頑丈な晒し布で下腹部を固く締め上げ、男の作業着で全身を嚴重に覆い隠して生きてきた。

もしこの身体が公になれば、人間社会で化け物扱いされて職を失うだけでは済まない。ましてや、本能と力に支配された獣人の巣窟であるこの山里で露見すれば、どのような扱いを受けるか想像するだけで背筋が凍りつく。

（早く境界線を確定させて、こんな山奥からおさらばしなきゃならないんだ。……何があっても、男の測量員としてこの仕事だけはやり遂げてみせる）

湊は奥歯を強く噛みしめ、嶺の大きな背中を追って、薄暗い山道を下り始めた。

急斜面の山道を半分ほど下り、切り立った岩壁と古い木造の測量小屋が見えてきたあたりで、先頭を歩いていた嶺の足が不意にピタリと止まった。

夕暮れの山林は急速に光を失い、谷底から這い上がってきた乳白色の夜霧が、木々の幹を濃密に覆い隠していく。冷涼な夜気の中

に、湿った土と腐葉土の匂いが立ち込めていた。

「……………どうした、嶺？急に立ち止まったりして」

湊が乱れた息を整えながら声をかけたが、嶺は振り返らなかった。

だが、その灰褐色の狼耳が激しく前後に動き、首筋の毛が警戒するように逆立っているのが見て取れた。

フシュー……………フシュー……………と、嶺の鼻腔から荒々しく熱い呼気が漏れ出している。その吐息の荒さは、急斜面を歩いた疲労によるものでは決してなかった。

（……………なんだ？様子が明らかにおかしいぞ……………）

秋はオオカミの発情期だ。昼間から嶺は時折、喉の奥をゴロゴロと鳴らし、落ち着かなげに空気を嗅いでいた。日没の今、その全身から放たれるオスのフェロモンが、尾根の冷気を熱で押し返していた。

そして、その濃厚なオスの獣人香を至近距離で浴びせられた湊の体内でも、恐ろしい異変が起き始めていた。

（っ……！？な、なんだこれ……腹の奥が……急に熱い……っ）

三日間にわたる過酷な山歩きの疲労と汗、そして嶺の放つ野性的なオスフェロモンの直撃を受け、湊の奥深くに眠っていた子宮が、突如として煮えたぎるように疼き始めたのだ。

下腹部の芯がきゅうつと甘く収縮し、熱い痺れが腰から背筋を駆け上がる。子宮口が熱く脈打ち、内側から這い上がるような疼きが止まらない。

晒し布で固く縛り上げられていた股間の割れ目から、抑えようのない熱く粘り気のある愛液がじつとりと溢れ出し、下着と晒し布を内側からぐっしりと濡らしていった。愛液は糸を引き、太ももの内側を伝って濡らす。

さらに最悪なことに、過度の発情によって、湊の毛穴から完熟した果実と濃厚な花の蜜が混ざり合ったような、カントボーイ特有の

甘く濃厚な「発情香」が、蒸気となって作業着の襟や裾から立ち上り始めたのである。

ふわりと、冷たい夜霧の中に広がる甘い蜜の香り。

その瞬間、嶺の身体が獲物を発見した野獣のように跳ね上がった。

嶺は素早く反転し、金色の両目をギラギラと輝かせながら、湊を正面から見据えた。その瞳孔は興奮で丸く見開かれ、理性を焼き尽くすほどの獰猛な光を宿している。

「……この匂いは、何だ」

地を這うような、恐ろしく低い声。

「え……？ な、何の匂いのことだよ……っ」

湊は動揺を必死に押し隠そうと声を張り上げ、無意識に後ずさりした。だが、足元がもつれて、背後の測量小屋の分厚い板壁に背中を打ち付けた。

退路が完全に塞がれる。

嶺は音もなく一步、また一步と間合いを詰め、湊の目の前に立ち塞がった。距離はゼロ。熊のように分厚い胸板から放たれる熱気が、湊の全身をすっぽりと包み込む。

嶺は顔を寄せ、湊の首筋から作業着の襟元へと鼻先を差し入れた。犬のように荒々しく、深く空気を吸い込む。

スウウツ……スウツ……！

「ひっ……！ な、何を嗅いでるんだ……離れろよ……っ！」

「……男の汗の匂いではない。果実の蜜のように甘く、子をはらむメス特有の、熟れ切った発情の匂いだ」

嶺の口唇から鋭い犬歯が剥き出しになり、喉の奥がゴロゴロと歓喜に震えた。

「何を馬鹿なことを言ってるんだ！ 俺は男だぞ！ 官給の測量技官・湊だ！ 男にそんな匂いがあるわけないだろ！」

「口でいくら誤魔化しても、オオカミの鼻は騙せん。……この甘い蜜の匂いは、お前の股間から立ち上っているぞ」

嶺の巨大な手が伸び、湊の腰を容赦のない力で鷲掴みにした。

「やめろ……！ 触るな！ 離せ、嶺……ッ！」

湊は必死に腕を振り回して抵抗したが、獣人の桁外れな腕力の前には全く歯が立たなかった。背負い籠が床に転がり落ち、平板と真鍮の測量羅針盤が乾いた音を立てて床に散らばる。

嶺は湊の身体を片手で軽々と抱え上げると、測量小屋の重い扉を蹴り開け、中の板敷きの上へと力任せに押し倒した。

閉ざされた測量小屋の薄暗がりの中、冷たい山風が板壁の隙間から吹き抜けていた。

板敷きに組み敷かれた湊の上へ、嶺の重厚な体が覆いかぶさる。

「離せよ……っ！ あんた正気じゃないぞ！ 発情期にあてられて狂ったのか！」

「正気だ。……俺の縄張りに迷い込んだ獲物が、極上の身体を隠し持っていたと気づいたただけだ」

嶺は湊の両手首を左手一本で頭上に束ねて押さえつけると、右手で湊の作業着の革帯を強引に引きちぎった。

ブツンッ、と革帯が千切れ、厚手のズボンが一気に膝下まで引きずり下ろされる。

「やめろおおおッ……！ 見るな！ 頼むから……見るなッ……！」

湊の悲痛な絶叫も虚しく、下腹部を幾重にも嚴重に締め上げていた晒し布が、鋭い爪で一息に引き裂かれた。

冷涼な山の夜気に晒されたのは——男らしい引き締まった腹筋の下に位置する、男の象徴を完全に欠いた、赤く熟れて愛液でびっしりと濡れそぼるまんこであった。

ぷっくりと充血して自己主張するクリトリス、薄桃色のふっくらとした肉襞、そして粘り気のある愛液をとろとろと溢れさせている未通の蜜穴。愛液はすでに太ももを伝い、板敷きに小さな染みを作っていた。

嶺の金色の瞳が、驚愕と、それを上回る猛烈な劣情によって大きく見開かれた。

「……やはりそうか。ちんぽも睾丸もない。……男の骨格をして、下には濡れそぼった女の穴と、子宮を備えている」

「違う……っ、俺は……俺は男として生きてきたんだ……っ！そんな目で見るな……っ！」

湊は羞恥と屈辱のあまり顔を真っ赤に染め、両脚を必死に閉じて隠そうと暴れた。男として社会で生き抜くために守り続けてきた最後の砦が、無残にも足元から崩れ去っていく。

だが、嶺は冷酷な笑みを浮かべ、逞しい膝を湊の太ももの間へ割り込ませて、その両脚を無理やり左右へ大きく押し広げた。

「男だろうが関係ない。俺の縄張りの中で、これほど甘い汁を垂らして発情している穴があるなら、俺の種を注ぎ込んでやらませるだけだ」

「ふざけるな……っ！ 誰があんたの種なんか……っ♡ 触るな……
ああッ!?!」

嶺の巨大で肉厚な手のひらが、湊のへその下、三寸——子宮の真上へと力強く置かれた。

ぐっ、と分厚い手のひらで下腹部を押し込まれる。

オオカミ獣人の熱い体温が皮膚を通して子宮へ直に伝わり、逃げ場を失った発情の熱が下腹部全体で爆発するように膨れ上がった。

「あぐツ……！？♡♡な、何を……っ！腹を強く押すな……っ♡胎の奥が……きゅんきゅん疼いちゃうだろ……ッ♡♡」

「へそ下三寸、子宮が激しく脈打っているぞ。……俺の手のひらの熱だけで、蜜穴から汁が噴き出している」

言葉通り、手のひらで下腹部を円を描くように揉みほぐされるたび、湊の割れ目から透明な愛液がとろりと押し出され、板敷きの上へぽたぽたと滴り落ちていく。

「見ろ、測量員。お前の身体は、もう俺の交尾を受け入れる形に開いているぞ」

「開いてなんか……ない……っ♡勝手に……身体が……っ♡♡」

嶺は下腹部を押さえたまま身を沈め、濡れそぼる湊の割れ目の真正面へと顔を寄せた。

そして、オオカミ獣人の肉厚で熱く、ざらついた舌先を、愛液でぐっしりと泡立つ割れ目へ直接落とした。

れろおツ……♡じゅるるるツ……♡ぬちゅ、れろりいツ……！



「ひああああッ！？！？♡♡♡舌っ……オオカミのざらざらした舌で……おまんこを直接舐めるなあッ……！♡♡♡」

「んちゅ……じゅるる……♡ぬぷ……ちろちろっ♡♡」

嶺の太い舌が、敏感に充血したクリトリスを左右から挟み込んで力強く転がし、割れ目の奥を舐め穿つ。

ざらついた舌の感触が粘膜を容赦なく擦り上げる強烈な刺激に、湊の腰がビクビクと跳ね上がり、つま先がピーンと伸びきった。

じゅちゅッ♡ぬちゅッ♡じゅるるるッ……！♡♡♡

「あ……ッ♡♡クリトリス……弾くの……やめっ……！♡♡舌が……熱すぎて……頭がおかしくなっちゃうッ……っ♡♡♡」

「極上の味だ、湊。……男の体つきをしているくせに、本物のメスよりも甘く濃厚な蜜を吐き出すな」

「名前を……呼ぶな……っ♡あんたなんか……味わわれたく……あああッ♡♡♡」

嶺は舌を激しくうねらせて肉芽を吸い上げながら、分厚い人差し指と中指の二本を、濡れそぼる未通の蜜穴の入り口へと滑り込ませた。

ぬちゅ……♡じゅぶり……ッ♡♡

「ひああッ……！？♡指っ……太い指が二本も……ナカに入っ

て……っ♡♡」

「まずは二本だ。狭いな……男の筋肉に締め付けられて、指が抜けなくなりそうだぞ」

嶺は指先をおなか側の粘膜へと強く押し当て、Gスポットのざらついた突起をえぐり上げるように激しく擦り上げた。

ずちゅッ♡ぐちゅぐちゅ……ッ!♡♡

「あぐっ……!?!♡♡そこっ……! お腹側のざらざら……太い指で擦られたら……っ♡♡気持ち……っ、気持ちよすぎるじゃないか……ッ♡♡♡」

「もっと鳴け。山中に響くほど大きな声で鳴くがいい」

嶺は指を三本に増やし、狭いナカを限界まで押し広げながら、激しくかき回した。同時に、空いた親指でぷっくりと膨らんだクリトリスを力強く押し潰してこね回す。

じゅちゅんッ♡ぱちゅんッ♡ぐちゅ、ぬちゅうッ♡♡♡

「駄目……っ！ 指だけで……そんな……奥まで掻き回されたら……ッ！ ああああッ……！♡♡♡」

ぷしゃああッ……！♡びちゃびちゃッ！じゅわあッ……！♡♡

未通の蜜穴から勢いよく噴き出した熱い潮が、板敷きと嶺の手首を真っ白に濡らした。

一回目の絶頂に全身を弓なりに反らせ、がくがくとけいれんする湊。だが、嶺の瞳に宿る発情の炎は、衰えるどころかさらに凶暴に燃え上がっていた。

「……はぁッ、はぁっ……♡もう……終わりだろ……っ、離せよ……っ」

湊が肩で息をしながら弱々しく呟いたが、嶺は無言のまま立ち上がった。

そして、自らのズボンの前をくつろげ、怒張しきった極太のおちんぽを引きずり出した。

「っ……!？な……んだよ、それ……っ」

湊の目が恐怖で見開かれる。

露わになったのは、成人男性の手首よりも太く、赤黒く脈打つオカミ獣人の剛直だった。先端の雁首（かきくび）からは濃密な先走りがぽたぽたと滴り落ち、根元には交尾時に大きく膨張して相手を拘束する「結節（ノット）」が、おぞましい膨らみを主張している。

「あんな……丸太みたいなの……入るわけないだろ……っ！壊れちまう……やめろッ！」

「壊れはせん。俺の種を受け止めるために、お前の穴はこれほど濡れている」

嶺は湊の腰を両手で力強く掴み上げ、板壁に手をつかせる形で立位後背位の姿勢をとらせた。

湊の引き締まった白い尻が突き出され、潮吹きで泡立つ蜜穴が、無防備にオオカミのおちんぽの前に晒される。

嶺はおちんぽの巨大な雁首を、蜜穴の入り口へとあてがい、全体重をかけて一気に腰を突き入れた。

ずぶりッ……！♡ぐちゅ、ずずずッ………！♡♡♡

「ひギャあああッ！？！？♡♡♡つ……貫かれたあッ………！奥まで………っ、太いのが……全部入ってきたあッ………！♡♡♡」

処女膜が無残に突き破られ、未通だった狭い肉襞が限界まで引き裂かれるように押し広げられた。

灼熱の激痛と、それを瞬時に塗り潰す狂おしいほどの快樂が、湊の脳髓を真っ白に焼き切る。腹の表面に、侵入した剛直の形がくつきりと浮かび上がる。

「…………ぐっ、処女穴の締め付けが凄まじいな。ちんぽが締め千切られそうだぞ」

嶺の喉から低く唸るような獣の声が漏れる。

「あぐっ…………♡♡板壁に手をつかされたまま…………こんな太いの…………♡あんたの腰つきは…………本当に乱暴すぎるだろ…………ッ

♡♡♡」

湊は板壁の木肌に爪が割れるほど強く食い込ませながら、涙目で意地になって皮肉を言い返した。

嶺は湊の引き締まった腰を大きな手で鷲掴みにし、容赦のない速度で後背から猛烈なピストンを叩き込み始めた。

ずちゅんッ♡ぱちゅんッ♡ぐちゅ、ぬちゅうッ♡♡♡ドスッ、ドスッ！

「あゝ……ッ♡♡激しすぎる……っ！ナカが……太いおちんぽで擦り潰されちゃうッ……！♡♡♡」

「お前の子宮口が、俺のおちんぽを欲しがって吸い付いているぞ、湊！」

「吸い付いてなんか……ないさ……っ♡♡あんたが……無理やり押し込んでるだけだろ……っ♡♡」

嶺はおちんぽを根元まで叩きつけ、子宮口の固い入り口を亀頭で激しくノックした。

ゴツンッ……！♡ぐちゅぐちゅ、ずぼぼッ！♡♡♡

「んああッ！？！？♡♡子宮の口……叩かれすぎて……壊れちゃうッ……！♡♡♡」

「受け取れ、湊！俺の種をお前の子宮に深く注ぎ込んでやる！」

「注ぐな……っ！はらませるな……っ！いやだ……でも……気持ちいい……気持ちよすぎるよおッ……！♡♡♡」

嶺はおちんぽを最奥まで深く突き刺し、子宮口に亀頭を完全に密着させた。

その瞬間、おちんぽの根元にある結節（ノット）が、ナカで急速に二倍近くまで丸く肥大化した。

ミチミチミチッ……！♡ぎちぎちいッ……！♡♡♡

「ひぎゃあああッ！？！？♡♡♡な……ナカで……ちんぽの根元が……大きく膨らんで……っ！抜けない……抜けなくなっちゃうッ……！♡♡♡」

「オオカミの交尾だ。……結節が解けるまで、お前は俺から離れられん」

嶺の腰が最後の一突きを深く沈め、子宮の最奥へと怒濤の勢いで濃厚な精液が放たれた。

ドクドクドクッ……！♡♡♡どぷッ、どくううッ……！♡♡♡どくどくううッ！♡♡♡

「ひああああッ！？！？♡♡♡あつい……っ！お腹の中に……大量のドロドロの種が……溢れるうッ……！♡♡♡」

ぷしゃあッ……！♡びちゃッ、じゅわり……ッ！♡♡♡

二回目の爆発的な絶頂を迎えた湊の蜜穴から、熱い潮と溢れ出た精液が混ざり合って噴き出し、板壁と床板を真っ白に染め上げた。子宮が熱い種でパンパンに膨らみ、下腹部がずっしりと重くなる。

射精を終えても、肥大化した結節（ノット）によって二人の身体は固く結合したまま外れなかった。

湊は板壁に寄りかかるようにして崩れ落ち、嶺の逞しい胸の中に抱きすくめられて、荒い息を繰り返していた。

子宮の奥には、ずっしりとした重みと熱い精液が満ち満ちており、脈打ったびに下腹部を熱く疼かせている。

「……はあッ、はあっ……♡ 抜け……ない……っ。いつまで……繋がつたままにするつもりだよ……っ」

「オオカミのノットは、種を確実に受胎させるためのものだ。半刻は外れん」

嶺は湊の汗ばんだうなじに顔を埋め、自らの匂いを擦り付けるように深く息を吸い込んだ。

「……明日からも測量は続けろ。だが、この山の中でお前の甘い匂いを隠すことはできん。逃げてでも、俺の鼻は誤魔化せない」

「……っ、ふざけるな……」

湊は悔しさに唇を噛み締め、涙でにじんだ瞳で嶺を睨み上げた。

「……俺は……絶対に逃げてやる……。あんたなんかの縄張りに……一生囲われてたまるもんか……っ」

「逃げられると思うなら、やってみるがいい。……その前に、お前の腹の中に俺の子を根付かせてやる」

嶺は低く笑い、繋がったままのおちんぽをナ力で微かに蠢かせた。

閉ざされた測量小屋の中、冷たい夜霧が窓を叩く。

第2話 白滝の沢と再交尾

宿舎の目覚めと逃亡計画の萌芽

翌朝、水木里（みずきのさと）の深い谷底に立ち込めた朝霧は、肌を刺すような厳しい冷気を孕んでいた。

集落の西端、鬱蒼とした杉木立の陰にひっそりと佇む粗末な木造宿舎の一室で、湊（みなと）は重い鉛のような瞼をゆっくりと押し開けた。

隙間風が吹き抜ける板敷きに敷かれた硬い藁布団の上で身じろぎした瞬間、下腹部の奥深くからズシリと重く鈍い熱痛が突き上げてくる。腰回りの関節は軋むように痛み、太ももの内側には、昨夜の過酷な交尾の痕跡である乾いた愛液と、子宮の奥から零れ出たオオカミの精液が白く固まっていた。

「……………つ、あ……………」

掠れた声を出そうとしたが、昨夜の絶叫と喘ぎで喉が完全に焼き切れており、微かな震える吐息しか漏れなかった。

湊は苦痛と屈辱に顔を歪めながらゆっくりと上体を起こし、乱れた仕込み作業着を脱ぎ捨てて、自らの股間をおずおずと見下ろし

た。

男の骨格と引き締まった筋肉を持ちながら、男の象徴を完全に欠き、生まれつき子宮と女性器を備えて生まれた「カントボーイ（胎持ち）」の身体。

昨夜、オオカミ獣人の警邏頭・嶺（れい）によって処女膜を容赦なく引き裂かれ、成人男性の手首ほどもある太いおちんぽで奥深くまで貫かれた未通の割れ目は、今も赤紫に腫れ上がり、呼吸を繰り返すたびにひくひくと小さく痙攣していた。

（……あんな化け物じみた獣人に、隠し通してきた身体のコモリをすべて暴かれて……あんな無茶苦茶な交尾をされるなんて……）

激しい悔しさと屈辱が胸の奥で煮え滾る。だが、それ以上に湊を恐怖させたのは、子宮の奥に注ぎ込まれた大量の精液のずっしりとした重みと、それに無意識に甘く疼いて反応してしまう自らの身体
の裏切りだった。

「……くそっ、負けてたまるか……。あんな獣人の思い通りにな
んて、絶対にさせるもんか……っ」

湊は桶に汲んであった凍えるような冷水で手ぬぐいを濡らし、内
腿にこびりついた汚れを念入りに拭い去った。

そして、痛む下腹部を庇いながら、新しい清潔な晒し布を手にと
った。腫れ上がった割れ目を覆い隠すように、幾重にも頑丈に下腹

部を締め上げていく。布が敏感な粘膜に擦れるたびにツンとした甘い痺れが腰を突き抜け、湊は奥歯を強く噛みしめて声を殺した。

厚手の仕込み作業着を着込み、革帯をきつく締めて呼吸を整えた湊は、枕元に広げていた測量野帳を開いた。

そこには、これまでに測量した境界稜線の図面が墨筆で精密に記されている。だが、湊はその余白に、昨夜の悪夢のような時間から密かに練り始めた「逃亡ルート」の計算式と高低差の略図を、極細の筆先で書き足していた。

水木里は四方を峻険な断崖と深い原生林に囲まれた天然の要塞だ。普段は獣人たちの見張りが厳しく、人間の足で抜け出すのは不

可能に近い。だが、北東の稜線にある「烏帽子岩（えぼしいわ）」の尾根筋は、人間の領地へと通じる古い廃道が辛うじて残っている。

（境界杭の打設が北東の尾根に達した時が、唯一の脱出の好機だ。……嶺の監視の隙を突き、測量道具を捨てて尾根を一気に駆け下りれば、半日で人間の警備屯所まで逃げ切れる）

この山里に囲われ、オオカミの種を宿すまで交尾を繰り返されるなど、絶対に御免だった。男の測量技官としての尊厳を守り、この身体のコツを抱えたまま生きていくためにも、何としても逃げ出さなければならぬ。

宿舎の古い板戸を細く開けると、冷涼な空気が頬を撫でた。広場の中央では、大きな焚き火が赤々と燃え盛り、獣人の女たちや年寄りが大鍋で鹿肉と野草の煮込みを作っていた。その香ばしい脂の匂いと煙が、朝霧の中に漂っている。

湊が通りかかると、焚き火を囲んでいた獣人たちが一斉に作業の手を止め、鋭い獣の瞳で湊の全身を刺すように見つめた。人間の役人に対する拭いきれない不信と警戒。だが、それだけではない。彼らの鼻先が微かに蠢き、昨夜から湊の身体に染み付いた「水木里の警邏頭の匂い」を嗅ぎ取って、怪訝そうに眉をひそめていた。

(……くそっ、鼻の利く獣人どもめ。……嶺の体臭が、作業着の上からでも漏れているのか……)

湊は冷や汗を滲ませながら、視線を足元に落として速足で広場を抜けた。身体のコールドを暴かれただけでなく、オオカミの縄張り印をつけられたような屈辱が、胸を鋭く締め付ける。

「おい、測量員。朝飯だ。陽が昇るぞ」

嶺の低く重い声が、背後から響いてきた。

湊は咄嗟に野帳を閉じ、背負い籠の底へ深く滑り込ませた。

「……今、行く」

湊が振り返ると、そこには灰褐色の狼耳をピンと立て、腰に山刀を佩いた嶺が立っていた。

嶺の鋭い金色の双眸が、湊の顔から首筋、そしてきつく帯を締めた下腹部へと、舐めるように滑り落ちる。その鼻梁が微かにひくりと動き、昨夜自らが注ぎ込んだ種の匂いを嗅ぎ取るように、喉を低くゴロゴロと鳴らした。

「……歩けるようだな。腰が抜けて倒れているかと思ったぞ」

「当たり前だ。俺は仕事をしに来てるんだ。あんたのつまらない発情ごっこに付き合ってる暇はない」

湊が冷たく言い放つと、嶺の口元に寧猛な薄笑いが浮かんだ。

「強がり言うな。……今日もしっかり案内してやる。ついて来い」

白滝の沢と匂い漏れの再発

二人が向かったのは、水木里の水源地である「白滝の沢（しらたきのさわ）」の上流域だった。

轟々と地鳴りのような音を立てて落下する落差三十メートル余りの滝から、冷たい水飛沫が霧のように舞い散り、周囲を取り囲む苔むした巨岩を濡らしている。谷底の冷氣は厳しく、息を吐くたびに白い煙が立ち上った。

周囲を取り囲むのは、人が足を踏み入れるのを拒むような険しい玄武岩の岩壁と、滑りやすい黒い巨岩ばかりだ。

白滝の沢へと続く山道は、苔に覆われた急峻な岩場が延々と続いていった。

足元を踏み外せば十数メートル下の急流へと真っ逆さまに転落する危険な難所だ。湊は背負い籠の荷綱を握り締め、岩の裂け目に指をかけながら慎重に登っていった。

だが、数歩先を歩く嶺は、そんな険しい岩壁をものともせず、跳躍するように軽々と登り詰めていく。その背中からは、昨夜よりも一段と濃密で熱を帯びたオスの獣人臭が絶え間なく放たれていた。

（……離れなきやいけないのに……風下に入ると、あの男の匂いが嫌でも鼻に入ってくる……）

息が上がるたび、嶺の放つ野性的なフェロモンが肺の奥深くまで吸い込まれ、湊の下腹部を甘く痺れさせていく。歩くたびに太ももの内側が擦れ合い、晒し布に染み込んだ昨夜の精液が熱く煮えたぎるようだった。

湊は沢沿いの急峻な岩場に平板測量台を据え、水準器の気泡を慎重に中央に合わせながら、視準器で対岸の切り立った岩肌を睨みつけた。

「……沢幅、二十八間。起点標より高低差十五メートル。よし、この岩棚の上に三十五番の木杭を打ち込めば、沢筋の境界線は確定する」

重い鉄製の木槌を両手で握り、赤く塗られた頑丈な木杭を岩の割れ目へと力任せに打ち込んでいく。

カーン、カーンと澄んだ打撃音が、滝の轟音に混ざって谷間に響き渡る。

過酷な岩登りと木槌を振るう重労働に、湊の額からは玉のような汗が流れ落ち、肌着がじっとりと背中中に張り付いた。手首には杭打ちの衝撃が重く響き、昨夜の疲労と相まって呼吸が激しく乱れる。

そして、作業が進むにつれて、湊の身体の奥深くで再び「異常」が頭をもたげ始めた。

(っ……、はあっ……く……っ、身体が……熱い……っ)

激しい運動によって全身の血行が急速に巡り、体温が上昇していく。それに伴い、昨夜子宮の奥深くに注ぎ込まれた嶺の濃厚な精液が、体内の熱で温められてどくりと疼き始めたのだ。

晒し布で固く締め付けられていた股間の割れ目から、昨夜の種と混ざり合った熱い分泌液がじつとりと溢れ出し、下着を容赦なく濡らしていく。

さらに、背後で腕を組んで監視している嶺から放たれる、秋の発情期特有の濃密なオスフェロモンが、容赦なく湊の感覚を刺激していた。

（だめだ……っ、また……熱が上がってきちゃう……っ。ここで匂いを漏らしたら……っ）

湊の意志とは完全に裏腹に、カントボーイの身体はオオカミの強大なオスの気配に本能的に屈服し、甘い愛液を次から次へと溢れさせてしまう。

作業着の襟元から、完熟した木苺と濃厚な花の蜜を煮詰めたような、甘くねっとりとした「発情香」が、白い湯気となって立ち上り

始めた。

水飛沫の冷たい空気の中に、突如として漂い出す強烈なメスの甘い匂い。

「…………ツ！」

岩場で見張っていた嶺の灰褐色の狼耳が、激しく前へ倒れた。

嶺の金色の瞳孔が瞬時に縦に細まり、獣の凜猛な欲望がその双眸を黄金色に染め上げる。

フシュー…………と、嶺の鼻腔から荒々しい熱風のような呼気が吐き出された。

嶺は無言のまま、音もなく濡れた巨岩を飛び移り、湊の背後へと一瞬で間合いを詰めた。

「おい、測量員」

背後から掛けられた声は、地を這う獣の唸り声そのものだった。

「ひっ……!!？」

湊が振り返ろうとした瞬間、嶺の太く頑強な腕が背後から湊の胴体を抱え込み、岩壁のくぼみにある平らな岩棚へと力任せに引きずり込んだ。

「な、何をするんだ……離せ、嶺ッ！」

「言ったはずだ。オオカミの発情期は一度の交尾では終わらん、とな」

嶺は湊を濡れた岩盤の上に押し倒し、覆いかぶさるようにして退路を塞いだ。

「お前の穴から、俺が昨夜注ぎ込んだ種と混ざり合った、極上の匂いが立ち上っているぞ。……身体の中で、もっと種を欲しがって啼いているな」

「欲しがってなんか……ない……っ！俺は測量の仕事をしてるんだ！邪魔をするな……っ！」

湊は必死に手を伸ばして近くの岩を掴み、這い出そうともがいた。だが、嶺の圧倒的な体重と筋力で完全に組み敷かれ、指一本動かすことすら許されない。

「口先では拒絶しながら、股間はこれほど蜜を撒き散らしているくせに」

嶺の巨大な手が、湊の作業着の帯を容赦なく引きちぎった。

巨岩の上の前戯と狂おしい開発

ブツンッ、と革帯が引きちぎられ、厚手のズボンと下着が一気に足首まで剥ぎ取られた。

「やめろ……っ！こんな開けた場所で……誰かに見られたら……ッ！」

「ここへ来る獣人は俺以外にいない。……見られるのを恐れるなら、声を殺して啼くんだな」

嶺は湊の下腹部を締め上げていた晒し布を鋭い爪で引き裂き、冷涼な山の風の中に、赤く熟れた湊の女性器を白日の下に晒した。

昨夜貫かれたばかりの未通だった蜜穴は、ぷっくりと充血したクリトリスと薄桃色の肉襞を濡れそぼらせ、昨夜の精液と混ざり合った透明な愛液をとろとろと溢れさせていた。

男らしい引き締まった腹筋と平らな胸板の下に、濡れそぼる無防備な割れ目が横たわっている。その異様で背徳的な光景が、嶺の獣の本能を狂おしいほどに煽り立てる。

とろり……とろとろ……ぽたぽた……。

濡れた岩盤の上に、湊の甘い蜜が落ちて小さな水たまりを作る。

嶺の喉が、歓喜と劣情でゴロゴロと激しく鳴り響いた。

「見ろ。昨夜貫かれたばかりの穴が、もう俺のおちんぽの形を覚えて、口を開けて待っているぞ」

「待ってなんか……ない……っ！ あんたのせいで……身体がおかしくなってるだけだ……っ！」

湊は羞恥に顔を真っ赤に染め、両手で股間を覆い隠そうとした。だが、嶺はその両手首を片手で頭上にねじ伏せ、逞しい膝を湊の太ももの間に割り込ませて、M字に大きく押し広げた。

「言葉はいらん。……身体で確かめてやる」

嶺の巨大で肉厚な手のひらが、湊の臍の下、三寸——子宮の真上へと強く置かれた。

ぐにゅっ、と掌で下腹部を押し込まれ、円を描くように激しく揉みほぐされる。

「あぐツ……！？♡♡ひあぁっ……！腹を……子宮の上を強く押すな……っ♡昨夜の種が……ナカで暴れちゃうッ……！♡♡」

「臍下三寸、子宮が熱を持って激しく脈打っているぞ。……俺の手で押されるたび、穴がヒクヒクと開いて蜜を吹き出している」

嶺は下腹部を押さえたまま身を沈め、濡れそぼる湊の割れ目へと、その太く熱くざらついたオオカミの舌を直接落とした。

れろおツ……♡じゅるるるツ……♡ぬちゅ、れろりいッ……！



冷たい滝の水飛沫が太ももの内側を伝う中、熱い舌が充血した肉芽を左右から挟み込んで力強く転がし、割れ目の奥へと潜り込んで襞の隙間を舐め穿つ。温度差が容赦なく腰を跳ねさせる。

「ひぎゃあああッ?!?!?♡♡♡♡舌っ……オオカミのざらざらした舌で……クリちゃんを直接吸い上げるなあッ……!♡♡♡♡滝の冷たい水が……混ざって……おかしくなるうッ……!♡♡♡♡」

「んちゅ……じゅるるる……♡ぬぷ……ちろちろっ♡♡」

嶺の太い舌先が、敏感に充血した肉芽を左右から挟み込んで力強く転がし、割れ目の奥へと潜り込んで襞の隙間を舐め穿つ。

冷たい滝の水飛沫が肌を冷やす一方で、股間には煮え滾るような熱い舌が容赦なく擦りつけられる。その強烈な温度差と快楽の波に、湊の腰がビクビクと跳ね上がり、つま先がピーンと伸びきった。

じゅちゅッ♡ぬちゅッ♡じゅるるるッ……！♡♡♡

「あ……ッ♡♡クリちゃん……弾くの……やめっ……！♡♡滝の音の中で……こんな淫らな音……立てるなよおッ……っ♡♡♡」

「お前の啼き声のほうが、滝の音よりよほど山中に響いているぞ、湊」

「響いてなんか……っ♡あんたの舌が……意地悪すぎるんだ……あああッ♡♡♡」

嶺は舌で肉芽を激しく弄りながら、太い指を二本、ぬかるむ蜜穴の奥深くへと滑り込ませた。

ぬちゅ……♡♡じゅぶり……ッ♡♡♡

「ひああッ……！？♡指っ……昨夜通されたばかりの奥に……太い指が入って……っ♡♡」

「昨夜よりも柔らかく解れているな。……すんなりと二本呑み込んでぞ」

嶺は指先をおなか側の粘膜へと強く押し当て、Gスポットのざらついた突起を抉り上げるように激しく擦り上げた。

ずちゅッ♡ぐちゅぐちゅ……ッ！♡♡

「あぐっ……！？♡♡そこっ……！お腹側の突起……太い指でぐりぐり抉られたら……っ♡♡頭が……真っ白になっちゃおうッ……！♡♡♡」

「もっと啼け。昨夜よりもっと大きな声で啼いてみせろ」

嶺は指を三本に増やし、狭い膣内を限界まで押し広げながら、掻き回すように激しく出し入れした。同時に、空いた親指でぷっくりと膨らんだクリトリスを力強く押し潰して捏ね回す。

じゅちゅんッ♡ぱちゅんッ♡ぐちゅ、ぬちゅうッ♡♡♡

「……っ、やめろ……！ 触るなよ、嶺……っ！」

「触るなど言いながら、お前の中の肉が俺の指をぎゅうぎゅうと締め付けているぞ。……見ろ、指の付け根までびっしりと愛液で濡れている」

嶺は三本の指を揃えて奥深くまで突き刺し、膣奥の子宮口の縁を撫で回しながら、親指でクリトリスを激しく擦り上げた。

びちゃびちゃと水飛沫と愛液が混ざり合う淫らな音が、滝の轟音の隙間を縫って岩棚に響き渡る。

「あぐっ……！？♡♡ひああッ……！そんな……奥と前を同時に擦られたら……っ♡♡腰が……勝手に跳ねちゃうッ……！♡♡♡」

「跳ねろ。……お前がどれだけ抗おうと、この身体はオオカミの種を受け入れるために作られているんだ」

「だめ……っ！ 指だけで……そんな……奥まで掻き回されたら……ッ！ また……潮吹きちゃう……ああああッ……！♡♡♡」

ぷしゃああッ……！♡びちゃびちゃッ！じゅわあッ……！♡♡

蜜穴から勢いよく噴き出した熱い潮が、濡れた岩盤と嶺の手首を真っ白に濡らした。

一回目の絶頂に全身を弓なりに反らせ、がくがくと痙攣する湊。

だが、嶺の金色の双眸に宿る発情の炎は、衰えるどころかさらに凶暴に燃え上がっていた。

屈曲位での再交尾とノッティング種付け

「……はぁッ、はぁっ……♡ もう……いいだろ……っ、離せよ……っ」

湊が肩で息をしながら弱々しく呟いたが、嶺は無言のまま自らのズボンを脱ぎ捨てた。

露わになったのは、成人男性の手首よりも太く、赤黒く脈打つオカミ獣人の極太のおちんぽだった。先端の雁首からは濃密な先走りかぼたぽたと滴り落ち、根元には交尾時に大きく膨張して相手を拘束する「結節（ノット）」が、禍々しい膨らみを主張している。

「っ……!？ま、また……その太いのを入れる気か……っ！壊れちまう……やめろッ！」

「壊れはせん。お前の穴は、すでに俺のおちんぽの形を覚えて待っている」

嶺は岩盤の上に仰向けに倒れた湊の両足首を掴み上げ、胸元へと深く折り曲げる「屈曲位」の姿勢をとらせた。

湊の引き締まった白い太ももが大きく開かれ、潮吹きで泡立つ蜜穴が、無防備にオオカミのおちんぽの真正面に晒される。

「この格好……っ、奥まで丸見えじゃないか……っ！ やめろおッ！」

「隠す必要はない。……余さず俺の種を受け止めろ」

嶺はおちんぼの巨大な雁首を、蜜穴の入り口へとあてがい、腰を沈めて一気に奥深くへと突き入れた。

ずぶりッ……！♡ぐちゅ、ずずずッ……！♡♡♡

「ひギゃあああッ！？！？♡♡♡つ……突かれたあッ……！足を折り曲げられたまま……いちばん奥まで……全部入ってきたあッ……！♡♡♡」

屈曲位によって膣の奥行きが狭まり、折り曲げられた太ももの重みで子宮が押し下げられ、極太のおちんぼが一突きで子宮口の固い入り口を激しくノックした。冷たい岩肌と熱い肉棒の温度差が、腰をビクリと跳ねさせる。

昨夜貫かれたばかりの肉褰が、みちみちと音を立てて限界まで押し広げられる。

「……ぐっ、素晴らしい締めりだ。屈曲させた脚のおかげで、ナカの締め付けが昨夜の倍以上強いぞ」

嶺の喉から低く唸るような歓喜の声が漏れる。

「あぐっ……♡♡深すぎる……っ！おちんぽが……お腹の皮を突き破りそうなくらい……奥まで届いてるうッ……！♡♡♡子宮の口が……直接こじ開けられてる……っ♡♡」

湊は岩肌に爪を立てながら、涙目で意地になって言い返した。

嶺は湊の折り曲げた両脚を片腕でしっかりと抱え込み、空いた手で湊の腰を固定すると、容赦のない速度で深く激しいピストンを叩き込み始めた。

ずちゅんッ♡ぱちゅんッ♡ぐちゅ、ぬちゅうッ♡♡♡ドスッ、ドスッ！

「あゝ……ッ♡♡激しい……っ！岩の上で……こんなに突かれたら……頭がおかしくなっちゃうッ……！♡♡♡」

「おかしくなれ！お前の子宮口が、俺のおちんぽを咥え込んで離さないぞ、湊！」

「啞え込んでなんか……ないさ……っ♡♡ あんたが……無理やり奥まで押し込んでるだけだろ……っ♡♡」

嶺はおちんぽを根元まで叩きつけ、子宮口の固い突起を亀頭の縁で挟るように激しく突き上げた。

「……あぐっ……♡♡ 激しすぎる……っ！ 岩肌に腰が打ち付けられて……砕けちゃいそうだよおッ……！♡♡♡♡」

「砕けはせん！ 俺の手がしっかりお前の腰を抱えている！……啼け、湊！ この山全部に聞こえるように啼け！」

嶺は腰の動きをさらに加速させ、怒濤のピストンで子宮口を連打した。

肉と肉がぶつかり合う凄まじい炸裂音が、滝壺の冷たい岩壁に反響する。

ドスッ！ぱちゅんッ♡ぐちゅぐちゅ、ずぼぼッ！♡♡♡

「ひぎゃあああッ！？！？♡♡♡奥……っ、子宮の口が……おちんぼの形に押し広げられちゃうッ……！♡♡♡」

「受け取れ、湊！俺の種をお前の子宮に深く刻み込んでやる！」

「注ぐな……っ！孕ませるな……っ！いやだ……でも……気持ちいい……気持ちよすぎるよおッ……！♡♡♡」

嶺はおちんぼを最奥まで深く突き刺し、子宮口に亀頭を完全に密着させた。

その瞬間、おちんぼの根元にある結節（ノット）が、膣内で急速に二倍近くまで丸く肥大化した。

ミチミチミチツ……！♡ぎちぎちいッ……！♡♡♡

「ひぎゃあああッ！？！？♡♡♡な……ナカで……ちんぼの根元が……また大きく膨らんで……っ！抜けない……抜けなくなっちゃうッ……！♡♡♡膣が……張り裂けそうな圧で……精液が一滴も漏れない……っ♡♡♡」

「オオカミの交尾だ。……結節が解けるまで、お前は俺から離れられん」

嶺の腰が最後の一突きを深く沈め、子宮の最奥へと怒濤の勢いで濃厚な精液が放たれた。

ドクドクドクッ……！♡♡♡どぷッ、どくうッ……！♡♡♡どくどくうッ！♡♡♡

子宮が自ら収縮して種を飲み干すようにひくひくと脈打ち、熱い精液が逆流する隙を与えず奥深くへ吸い上げていく。

「ひああああッ！？！？♡♡♡あつい……っ！お腹の中に……大量のドロドロの種が……溢れるうッ……！♡♡♡子宮が……勝手に吸い上げてる……っ♡♡♡」

ぷしゃあッ……！♡びちゃッ、じゅわり……ッ！♡♡

二回目の爆発的な絶頂を迎えた湊の蜜穴から、熱い潮と溢れ出た精液が混ざり合って噴き出し、冷たい岩盤を真っ白に染め上げた。

結合拘束の余韻と逃亡への誓い

射精を終えても、肥大化した結節（ノット）によって二人の身体は固く結合したまま外れなかった。

湊は岩盤の上にぐったりと横たわり、嶺の逞しい胸の中に抱きすくめられて、荒い息を繰り返していた。

子宮の奥には、昨夜以上のずっしりとした重みと熱い精液が満ち満ちており、脈打ったびに下腹部を熱く疼かせている。

「……はあッ、はあっ……♡ 抜け……ない……っ。いつまで……繋がつたままにする気配だよ……っ」

「オオカミのノットは、種を確実に受胎させるためのものだ。半刻は外れん」

嶺は湊の汗ばんだうなじに顔を埋め、自らの匂いを擦り付けるように深く息を吸い込んだ。

「……北東の尾根、烏帽子岩まで杭を打つ日が来るまで、お前はここから一步も出られん。匂いが変わればすぐに嗅ぎつける。……仕事は続ける。だが、お前の子宮は俺の種で満たし続ける」

「……っ、ふざけるな……」

湊は悔しさに唇を噛み締め、涙で滲んだ瞳で嶺を睨み上げた。

（……絶対に逃げてやる。烏帽子岩の廃道まであと数本の杭。そこまで耐えれば、必ず逃げ切れる。この身体がどんなに疼いても、俺は測量員だ……）

湊は岩の隙間に転がった背負い籠の中の野帳を密かに見つめ、胸の奥で固く誓った。

「……好きにしろ。でも俺は仕事を終わらせる。あんたの発情なんて、どうでもいい」

嶺の金色の瞳が微かに細まり、低く笑った。

「仕事を続ける。だが、次に匂いを漏らした時は、もっと奥まで
抉ってやる」

白滝の水音が冷たく響き続ける中、二人はまだ固く繋がったまま、次の戦いを静かに待ち構えていた。

言葉による和解も、互いへの理解もない。

ただ、暴かれた身体と野生の発情、そして逃げられない縄張りの鎖だけが、二人の関係を深く、残酷に縛り上げていた――。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名 辺境のオオカミはカントボーイを孕ませる

サークル もふもふといっしょ！

発行日 2026年8月16日

レーティング R18